

今やヨーロッパで大問題を抱えているのは難民問題です。戦に明け暮れる母国を見限り、命をかけて、他国に逃げ延びて来るわけですから人道的には助けなくてはいけないのです。がそれぞれの国に立場が御座います。すんなりと救護の手を差し伸べるわけにはまいりません。膨大な費用と共に雨露あめつゆをしのげる場所の提供も必要です。文化の違いもさることながら、やはり一番問題になるのが宗教の違いでしょう。日本人はあまり宗教に興味を示しませんが外国は違います。まず宗教の重みです。宗教が日常生活の原点にあり、心の支えたもとになっているからです。今、日本ができるのは財施の負担ぐらいでしょう。

**袖すり合うも他生の縁」そうです何事も因縁因果決まり事だと思えば苦勞するにも道が開けます。** 水を因、器を縁として人の一生は考えられます。水は器に従ってその姿を変えていきます。時に水が逆らう姿は当あたに水が逆流したと思わざるを得ません。水性格も流れる水量によって大きく変化します。基本的に生命を維持する為の水は雨水です。時として雨が洪水を引き起こしますが、雨の恩恵無くして生活に必要な水量は確保できません。川の源流を尋ねれば必ず山奥の地下水が地上に沁しみ出てくるのです。雨水が山の地下水として何年過こして来るかは解りませんが有難い事です。しかしながら最近自然の環境が悪化し、自然の水系が変わってきました。我々人間は天地の恵なしには生きられません。私は願う 神よ佛よ見守り賜え。我等を身守り賜え」と。良寛禅師は「おろかなる身こそなかなかうれしけれ彌陀の誓ひに逢うと思えば、

み佛のまこと誓ひの弘ひろからば いざなひ給へ常世とこよの国に」、如何なるが苦しきものと問ふならば人をへだつる心と答へよ」と。人々の心は顔形ちが違うように別々である。人の心は本来清浄無垢のもの、しかしながら環境に執着、一変して染汚せんなの心、迷妄の情と転ずるのである「と良寛禅師の様に動く心に凡夫は全て迷いの中に閉じ込められているが阿弥陀様の誓願によって往生できると喜び賜うのであります。称名念佛といえ、成田有恒上人は浄土宗の宗務総長時代より、増上寺の住職として、お亡くなりになるまで日に四万遍の念仏を称えられ、極楽浄土を感じ取れるようになったと申されました。今年徳川家康公の没後四百年です。三河の菩提寺、大樹寺でも盛大に法要が営まれました。導師を勤められました、堀田岳成貫主様も七月二九日に遷化されました。私も葬儀に参列致しました。強運家康公は暇あれば念仏を書かれました。戦国の世なれば、命終の時を選ぶことが出来ない時代背景があったかもしれないし、又、家康から五代前、親忠ちかただの五男ごんぎやうに存牛ぞんぎゆうというお坊さんがみえた事に起因するかもしれませぬ。存牛上人は後に知恩院ちえんいんの猊下げいかに成られたと聞いております。生末いんぐそを思えば阿弥陀様に 手を引いて頂いて極楽浄土へ参りたい。お念仏の縁を求めよ